



### 時間について、そして修了生へのエール

生命科学研究科長

井 垣 達 吏

生命科学研究科は昨年創立25周年を迎え、去る12月2日に創立25周年記念行事を開催いたしました。ご臨席賜りました湊長博総長をはじめご来賓の先生方、本研究科の名誉教授、元教職員、修了生の皆様方、そして現役の教職員・学生の皆様方に改めて厚く御礼申し上げます。本研究科の25年の歩みを振り返り、先達の先生方の偉業に改めて畏敬の念を抱くとともに、本研究科がこれまでに生み出した多くの成果や輝かしい人材を目の当たりにし、25年の重みと未来の可能性を大いに感じる時となりました。とても身の引き締まる、そして温かい気持ちになる会でした。

さて、今から25年前というと、ゲノムプロジェクトがまさに佳境を迎え、これから生命科学が一変するという機運に満ち溢れた時期でした。私はちょうど大阪大学医学系研究科の博士課程に進学したばかりの大学院生で、京大に生命科学研究科というのが発足したというニュースを耳にし、その創立メンバーリスト（教授陣）を見て驚愕し興奮したことを今でもよく覚えています。こんな凄い研究科にはまず合格できないな、というのが大学院生としての私の最初の感想でした。そして、こんな凄そうなところからどんな研究が出てくるのか、その後も常に気になる存在となりました。とはいえ、私は阪大の三浦正幸先生の研究グループになんとか入れていただくことができ、本当に嬉しくてがむしゃらに研究に打ち込みました。大学院での研究は楽しすぎて、ここにはちょっと書けないくらいの長時間にわたって研究室に滞在し、膨大な量の実験をしました。実験を組む時にはかなり頭を使って考えなければいけないので、実験の量は確実に自分に研究力をつけてくれます。そして、先生とはランチの時間や立ち話で毎日何度もディスカッションをしました。大学院で身につけたほとんど全てのものは、自分で行った実験と、三浦先生とのディスカッションから得たものだと思います。

あれから25年、本当にあっという間でした。あと残り10年の現役生活は、もっと一瞬で終わることもわかっています。この一瞬をどう生きるかということ、5年くらい考え続けて、ようやくまとまってきたかなと感じています。自分の頭の速度に呆れてしまいましたが、ある意味これがAIとは違う人間の強みなのかもしれません。時間ほど大切なものはないということ、かなりの時間をかけて学びました。そして、時間をかけて考えることの大事さを、何度も間違えながら学びました。そのプロセスこそが大事だったと思います。研究がスイスイと思うように進むときは無条件に楽しいですが、自分の考えが全く足りていなかったことを自然から思い知らされる時もまた、サイエンスの醍醐味を感じます。サイエンスで本当に感動するのは、そういう時なのかもしれません。そして、そういった喜怒哀楽をチームで共有できるのが、生命科学系のサイエンスの一番楽しいところのような気がします。

生命科学研究科は次の25年に向けた新たなスタートを切りました。この時期、たくましく成長した学生さんたちが研究科を修了し、新たな世界に飛び込んでいくのを見送りながら、これからの長くて短い大切な時間を濃密に楽しんで欲しいと願うばかりです。